

北海道における縄文世界遺産の拠点機能のあり方に関する懇談会 第2回会合 議事概要

- 1 日時 令和4年7月12日(火) 10:00～12:00
- 2 場所 道庁本庁舎13階 環境生活部1号会議室
- 3 出席者 (構成員) 阿部 千春氏(道南歴史文化振興財団)
大津 和子氏(北海道ユネスコ連絡協議会)
國木田 大氏(北海道大学大学院)
渋谷 和憲氏((公社)北海道観光振興機構)
森 朋子氏(札幌市立大学)
(道側) 塚田文化局長、家山室長、寒河江主幹、児玉係長、村本主査
依田専門主任、梅田主事
- 4 議題
 - (1) 第1回会合のまとめについて
 - (2) 拠点機能に係る各機能の具体的な考え方とその検討について
- 5 概要
5月開催の第1回会合のまとめを行うとともに、拠点機能に係る各機能の考え方について、各委員に発表していただいた内容について検討を行った。
- 6 主な意見
 - 第1回会合のまとめについて
 - ・「ESD」の日本語訳は、「持続可能な開発のための教育」の方が一般的。(大津)
 - ・「縄文世界遺産の拠点機能のイメージ」中、二本目の柱の教育機能について、「世界遺産」を「世界遺産教育」とした方が良い。(大津)
 - ・「OUV」の日本語訳は「顕著な普遍的価値」が一般的。(森)
 - 各機能の具体的な考え方とその検討について
 - (1) 保全機能について
 - ・機能の内容は、拠点をどのように置くかということにも連携・連動する。(國木田)
 - ・拠点機能としては、環境保全に取り組める人材の育成と科学研究。保全するには法で守る、人で守る、この二つがあるが、法で守ることは各自治体がやっていくことで、拠点機能としては人で守るところのバックアップをしていく。なぜ、この資産が重要なかということを拠点として発信し、人材育成をしていく必要がある。(阿部)
 - ・各自治体へ科学的分野での保全の支援というようなことも必要。(阿部)
 - ・OUVには各資産の位置づけがあって、これが一番大事。世界遺産のストーリーというのは、遺跡の価値とはまた別なところがあるので、今回ガイド教本を作ったが、それに基づいてこの遺跡はここが重要だからこういう観点で守っていった方がいいというのを発信していくのは、拠点が担うべき。(阿部)
 - (2) 教育機能について
 - ・全体を見渡すことができるセンターが必要ではないか。(大津)
 - ・北海道の風土や習慣、伝統にのっとった北海道独自のもので、ユネスコに認められるようなプログラムを作ることが、今後の大きな役割と考える。(阿部)
 - ・「知る」ということが大事であり、必要な教育を体系化して決めるべき。(森)
 - ・体系化して地域遺産化する、これが人で守るということに一番つながると思う。(阿部)
 - ・教育については、4道県で共通したものがいいと思う(國木田)
 - ・国で統一された教育の基本の枠組みはあるが、現実には、都道府県教育委員会が中心

になっている。とりあえず、地域をベースにしたものを作り、それをさらにより良いものにしていくことが現実的ではないか。(大津)

(3) 展示機能について

- ・展示はレプリカでも良く、本物を見るために現地へ誘導する工夫が必要。(阿部)
- ・単に見てもらっただけではなく、見る人が疑問を持ったり、さらに関心を深めたりするような仕掛けを盛り込むような映像を作らないといけない。(大津)
- ・展示としては、ただ見るだけでなく例えば、児童や生徒が触って理解できるような面白い仕組みが必要では。(大津)

(4) 情報発信機能について

- ・一般的な観光客にどうやって縄文を選んでもらうかを考える必要がある。「見て、聞いて、面白い、楽しい」が大事。欧米の方は特にストーリーを大事にする。(渋谷)
- ・縄文の価値や魅力をどのように発信していくかというブランディングの観点の情報発信が重要。また、資産が広域に分布しているので、プレイスブランディングの観点が必要。「未来へつづく、一万年ストーリー。」というキーワードがあるので、活動主体が効果的に活動できるようにマネジメントできる組織が必要。この情報発信の一つの柱には、「ブランディングのための情報発信」ということを入れた方が良い。(阿部)

(5) 誘客機能について

- ・マーケティングやブランディングは、組織横断的にマネジメントできる体制があった方が良い。「存続可能な観光」の定義を明文化した方が良い。(渋谷)
- ・「存続可能な観光」の意味としては両方あり、SDGsの持続可能な社会、もう一つは観光の収益を文化財の保護や地域に還元させ、それで持続可能にするという意味。欧米型はドネーションによって成り立つ、それも目指していけたら良い。(阿部)
- ・「サステイナブル ディベロップメント」は「持続可能な開発」という「ディベロップメント」の方がキーワード。文科省が日本語に訳すときに、「持続可能な社会」になった。指導要領もそうなっている。持続可能というのは長続きするということではなく、持続可能な開発を目指す社会。「開発」というのは色々あるが、ここで言われるのは「人間開発」。これは国連のUNDP(国際連合開発計画)が言っている概念で、誰もが自分の内の中に秘めてる可能性を花開かせることができる、それが「ディベロップ」だと言っている。そのためには、誰もが、安心して安全に暮らせる社会、それが持続可能な社会となる。「持続可能な観光」だとしたら、それは、持続可能な開発に繋がるような観光」なので、持続可能な開発を目指す方向での、社会に繋がる観光だと考えるとわかりやすいと思う。(大津)
- ・アドベンチャートラベルの人のほとんどが、新しい価値観に触れることによって自分自身が変わることを望んできている。「持続可能な観光」にはその観点も必要。自身の開発。誘客機能については、戦略とプロモーションがあると思うが、プロモーションは、ブランディングから一括して市町と連携しながら拠点がやっていき、戦略については、観光振興機構と共に行うこともできると思う。(阿部)

(6) 交流機能について

- ・文化の多様性を学び、自分達で発信してお互いに理解を深めていくことが大事。(大津)
- ・4道県単位で行う部分と、国内でのガイド同士の交流等、様々なレベルでの交流があると思う。世界遺産になったことにより、国際条約によって地域が世界とつながっているということを実感してもらうことも大事。オンラインの交流になるかと思うが、交流が深まると実際に行つての交流ができればいいと思う。(阿部)
- ・交流にかかる費用をどのように生み出すか、それこそサステナブルだと思う。(森)
- ・今後、欧米の富裕層が来るようになるが、寄付を受けていく仕組みができていない。拠点機能自体が稼げる機能を持つなど、これから文化観光振興を進めていくために検討が必要ではないか。(阿部)

(7) 研究機能について

- ・ インタープリテーションに関する研究については、ガイドのあり方も含めて新しい対応をしなければならない。O U Vに関する研究については基礎的な研究をしなければならない。今後、ガイドをするにもデータが無ければ話せないで、インプットのための調査として重要。(阿部)
- ・ 研究テーマ、さらにその研究成果をどう発表するのか、資金はどうするのか、という観点でなければできないことについて枠組みを決めなければならない、研究成果に基づいたものにしないと、ただの観光になってしまう。北海道の自然環境とともに縄文人が豊かな暮らしをして、それが持続可能だったということをいかに伝えるか、ということ。それを研究でどう証明するか。環境変動に対して、どう適応してたかというのは研究の柱にしていかなければならない。(國木田)